慰霊碑の前で

撮影：Flyingbird様

慰霊碑の前で

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17906016

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, アキーム

かりんと様user/19207217から頂いたリクエスト「突然のヒュンマを浴びる人」をもとに書いたもの。戦車隊長殿編。
以前、Twitterに上げていたものです。
表紙画像は、Flyingbird様　https://instagram.com/flyingbird_rtw　撮影のものをお借りしています。
絶妙すぎるお写真で、震えました・・・。

構想としては、もっと長い構成だったのですが、それだと、時間の余裕的に、いつ書けるかわからん〜と思い、短くまとめました。
おかげでだいぶ端折ったため、何でこの二人が一緒にいるんだとか、何故、あの人が関わっているのかとかが出ていません。
一番中心のシーンを書いちゃったので、ロングversionをどうするのかは未定です…💧

ただ、アキームとヒュンケルは意外に共通項が多いなあと思い、通じるものがあるんじゃないかと、これを書いて思いました。また取り組んでみたい二人です。

2022.6.15　Twitter投稿

Table of Contents

慰霊碑の前で

　パプニカ大礼拝堂近くには、かつての戦いで散った戦士たちを悼む日が建立されていた。
　そこには、我がベンガーナ戦車隊の英霊も祀られていた。
　巨大な岩の巨人を相手にした、あの戦いのときから数年が経ったが、自分は、毎年、この慰霊祭の時期になると、かつての部下たちを参りにこの地を訪れていた。
　いつもの年は、ひっそりと、ひとりで訪問していた。
　だが、今年は、自分とともに、この地を訪れた方がいた。
　彼は、自分と同じように、慰霊碑の前に膝をつくと、頭を垂れて哀悼の意を表した。
　その横顔は、ひどく切なげで、心から、亡き者たちを悼んでいるのだと、武骨な自分にもすぐに分かった。
　彼もまた、大勢の部下を失ったと語っていた。
　そのせいだろうか。
　同じ軍人として、将として、彼の生き様や戦い方にはひどく心揺さぶられるものがあった。
「あの・・・ヒュンケル殿。」
　自分が声を掛けると、彼は、ゆっくりと顔を上げ、自分を見た。
「感謝する、アキーム殿。俺一人では、なかなかこの地を訪れることはできなかった。」
　彼がそのように語るその原因は、わかっていた。返す言葉もなく、自分はただ、首を横に振った。
　彼が戦いに向かう姿は、何度も目にしてきた。
　自分にとって、彼は、獣王とともに、自分たちベンガーナ戦車隊を救ってくれたひとりだった。
そして、戦線をともにするうちに、彼が、戦士として、また、将として、極めて優れた技能と、多大な経験を有していることを実感した。
　その彼が、いまは、剣を置いている。
　それが不思議だった。

体を壊したことは知っているが、その指揮力は健在のはずだ。
　あの戦いの日々は、やはり、彼にとって辛いものだったのだろうか。
　上手い言葉が見つからず、自分は、ためらいがちに彼に声を掛けた。
「ヒュンケル殿・・・お尋ねしてよろしいか。」
「何かな。」
「・・・貴公は、何故、あの日々の中、戦い続けることができたのでしょうか。
　お立場、お辛かっただろうとお察します。」
　すると、彼は、一瞬、驚いたように目を丸くした。
　だが、彼は、すぐにその驚愕を霧消させると、ふっと、笑みを浮かべた。
「・・・そうだな・・・。
　ひとつは、師の教えのため、だろう。」
「師・・・アバン殿、ですか。」
「ああ。
　俺が困難に突き当たったとき、それを超えさせてくれたのは、いつも、師の言葉だった。
　あの人の志した理想を、俺たちは歩み続けた。
　それがひとつだ。」
　彼は、そこでいったん言葉を区切った。
　しばしの沈黙の後、穏やかに言葉を紡いだ。
「そして、もうひとつが、妻の愛だった。」
　その意外な言葉に、自分は少なからず衝撃を受けた。
　彼は、淡々と語った。
「魔王軍にいた頃の俺は、誤解から来る師への恨みと幼稚な復讐心に捕らわれた、ひどく幼い男だった。
　だが、そんな俺に手を差し伸べてくれたのが、妻だった。」
　彼は、愛おしそうな眼差しを遠くに向け、語った。
「妻に出会い、愛されることも、尊重されることも知った。
　・・・いや、思い出させてくれた。
　誰に批判されても、多くの人々に非難されようとも、俺に手を差

し伸べ続けてくれた妻の愛が、俺を支えてくれた。
　己の罪の償いのために戦い続けることができたのも・・・彼女のおかげだった。」
　そうして、彼は、自分にその視線を向けると、困ったような笑みを浮かべた。
「おかしいかもしれんな。俺のような男が、こんな言葉を使うのは。」
「いいえ・・・貴公らしいかと、存じます。」
　そうか、と思った。
　彼にとっては、戦い続けたことも、そしていま剣を置いたことも、同じことなのだ。
　愛されることと、それを返してゆくこと。
　ただ、その手段が変わっただけのことなのだ。
　自分の言葉に、彼は、ほんの少しだけ、嬉しそうな笑みを浮かべた。
「奥方は・・・。」
「今、身重だからな。慰霊祭にも連れてこられなかった。」
「そうでしたか。」
　ふと、彼は、大礼拝堂の前を通る太い街道に視線を送った。
　そして、目を見開くと、驚愕の声を上げた。
「・・・マァム？」
　いましがた話に出たばかりの、彼の奥方が、街道に立っていた。
　急いで、彼は、奥方の元へ駆け寄った。
　自分もその後を追ったが、途中で、ふと、無粋な気がして足を止めた。
　彼らに背を向けて、大礼拝堂に目をやった。
　風に乗って、背後から、二人の会話が聞こえてきた。
「どうしたんだ？こんなところまで。
　俺がここに来ると、聞いたのか？」
「ええ・・・先生から。」
「ルーラで来たのか？・・・体に障るだろう。」
「先生のルーラで送ってもらったの。衝撃もなかったから大丈夫。」

「・・・どうして、ここまで来たんだ？」
「だって・・・貴方が泣いているような気がして。」
「・・・大丈夫だ。
　アキーム殿も一緒だった。」
「うん・・・。」
　漏れ聞こえてくる会話に、自分は、懸命に聞こえないふりをした。
　だが、奥方が彼に向ける思いが、そしてまた、彼の奥方への愛情が、染みわたるように広がっていくのを感じた。
　人は、愛されることで、尊重されることで、生きていくことができる。
　ヒュンケル殿、貴公は、いま、幸せなのですな。
　心の中で、彼に呼びかける。
　彼の声が聞こえた。
「アキーム殿！
　すまないが、妻を送ってやりたい。
　こちらで失礼する。」
　自分は、彼に振り返ってうなずいた。
「承知いたしました。」
　そして、ひときわ大きな声を上げると、彼の奥方に声を掛けた。
「マァム殿！
　お身体、大事にされよ！
　元気なお子を産んでくだされ！！」
　手を振って自分に答える彼女は、明るい笑みを浮かべていた。